小学校教材「源氏物語」と時局

――「サクラ読本」における本居宣長――

有働　裕

第四期国定教科書の『小学国語読本』、いわゆる「サクラ読本」は、その巻一（一年生用）の使用が昭和八年から開始され、昭和十三年には巻十一（六年生用）の使用が始まった。その中に、「源氏物語」という教材が収められている。

紫式部と『源氏物語』についての簡単な解説、および『源氏物語』の中の二場面の現代語訳からなるこの教材は、極めて斬新で意欲的な試みとして称賛を得た。その一方で、小学校教材としては不向きであるとの非難も受け、橘純一という国学・国文学研究者のように削除を要求する者まで現れた。その後もこの教材は、国民学校期の第五期国定教科書、いわゆる「アサヒ読本」でも若干の改訂はあったものの掲載が続き、終戦直後の「墨ぬり教科書」まで生き続けていた。

私が、この教材をめぐる一連の出来事を整理し、その背後にあるものを明らかにしなければならないと考えたのは、ここに古典文学と教育とのかかわりを考える場合に、避けて通ることのできない重要な問題が潜んでいると思われたからである。詳述は別の機会となるが、戦後この問題が深く追究されなかったところに、今日の古典文学教育の抱える問題性が露呈しているとさえいうことができよう。

ところで、この教材をめぐる一連の出来事を、私は次の三つの観点から考察してみたいと考えている。

(1) **教材「源氏物語」について**　教材「源氏物語」はどのような性格の教材であったのか。それはどのような意図・背景によって掲載されることとなったのか。また、教室ではどのような教材として生かされることが求められていたのか。これらのことは、現在の観点から、どう評価できるのか。

(2) **橘純一の批判について**　教材「源氏物語」を、橘純一はどのような理由から批判したのか。その背景には何があったのか。橘純一の言動を、どのように評価すればよいのか。

(3) **論争の影響と意義について**　教材「源氏物語」の是非をめぐる論争は、古典文学・古典文学教育をめぐる当時の論調にどのような影響を与えたのか。この一連の出来事を、国語教育史

の上にどのように位置付ければよいのか。

本稿で扱うのは(1)に関する内容の、基礎的な資料の整理であって、教科書本文・編纂趣意書・教師用指導書を中心に考察する。(2)については別稿（愛知教育大学教科教育センター研究報告第二一号）にまとめたので参照していただきたい。(3)については未だ資料収集の段階にとどまっており、今後の課題である。

一、時流への抵抗か迎合か

――「サクラ読本」・「源氏物語」の評価

「源氏物語」を収める第四期国定教科書全体の傾向については、次のような理解が一般的なものとなっているように思われる。

明治三三年、「国語」科という教科が成立して以後も、（中略）依然として国語教科書は、他教科の内容を包含させられた、実学的内容中心のものとなっていた。井上監修官は、サクラ読本編纂にあたって、本来「読本は国語独自の立場を持して、教材を言語・文学に限定すべきである」という信念をもって臨んだが、たまたま時勢が、国家主義体制に急転回していく局面に際会したため、このサクラ読本の内容も、本来文学読本であろうと意図したにもかかわらず、上学年に進むに従い、国粋主義的、国民精神作興的方向に傾斜していかざるをえなかった。

しかし、「昭和を代表する新読本は、少なくとも材料の選択及び表現に於て、常にそれが文学たるべきことを目標とし、単なる実科内容の記述を避け」ようとした編集者の意図は、全巻を通じて生かされ、文章表現そのもの、表現の態度、題材のとりあげ方など、たとえば、公民的教材の「対話文」化、「生活文」化など、すべての点にわたって、可能なかぎり文学的教材たらしめようとした成果をうかがうことができる。（井上敏夫『国語教育資料第二巻　教科書史』昭和五六年・東京法令）

大正時代の文学教育の隆盛と昭和前期の国粋主義教育のはざまに立つこの教科書にあって、「源氏物語」は、まさに文学教育的な傾向を示す側の代表的教材とみなされてきた。確かに王朝貴族文学の頂点を極める『源氏物語』は、ファシズムとは一見相容れないもののように思われる。『古事記』や『万葉集』、あるいは『太平記』などの記述の一部が、戦時下において積極的に「時局にふさわしい教材」として利用されたことは容易に理解できるが、『源氏物語』の物語世界はあまりにそれらからはかけはなれている。

だとすれば、この教材「源氏物語」をめぐる一連の出来事についても、次のような図式で理解できるように思われてくる。すなわち、ファシズムが進行する昭和戦前期において小学校教材に「源氏物語」が採用されたことは、いわばファッショ化する時代の流れへの、教科書編纂者のささやかな抵抗姿勢の反映

であった。それゆえに国粋的な学者からは厳しい攻撃も受けたが、終戦時までこの教材は生き続けた、と。

事実、この教科書の編纂に携わった井上赳は、戦後次のように述べている。

ところで、意外にも、後日に至って、きわめて国粋的な一学者から、源氏物語は淫靡の小説で、これを小学児童に示すとはけしからん旨、同氏の編集する雑誌において数回の攻撃を掲げられました。それがたまたま国粋主義者たちに反響を与えたので、同氏はさらにこれを議会の問題とすべく種々計画するに至りました。しかし、私はこれをほとんど歯牙にもかけず、あらかじめ上司に説いて、大臣の議会答弁資料を作成しておきましたが、幸いに私の友人、先輩諸氏の取り計らいで、かの頑迷な学者に説得し、その誤った態度を改めさせるべく努めましたので、とうとう議会の問題ともならないで済んだのでありました。

これを要するに、私一個人はわが国の教育が自由主義を謳歌し始めたころから、ほとんどそれが絶頂に達したころにかけて、最も教科書編纂の研究並びにその実行に心血をそそぎました。その結果として私につちかわれた自由自主の精神は、戦時下といえども不動であり、この精神に従って、きわめて微力ながら軍部と戦い、極端な国家主義、国粋主義と戦いつつ、国民学校教科書編纂の事務を処理し、最後に至って文部大臣のいわれなき干渉と軍部の越権を憤り、いさぎよく辞表を提出し得たのであります。こういう意味で、私はかつてのわが教育の自由主義時代に対して衷心感謝するものであります。（井上赳著・古田東朔編集『国定教科書編集二十五年』昭和五九年・武蔵野書院）

この文章は、国定教科書の編集者として戦後に戦争責任を追及された時に、文部省の審査委員会に対する「反証」として井上氏が作成したものである。そのため、いささか「軍部と戦う抵抗者」としての姿勢が強調され過ぎているような気がしないでもない。

ここで問題になるのは、以下のような点である。

①教材「源氏物語」が、もし自由主義の立場からの軍国主義への抵抗であるのならば、具体的にどのような点に自由主義の精神が反映されているといえるのか。教材「源氏物語」の本文や教師用指導書の指示は、自由主義の精神をどれほど具現化するものであったのか。

②教材「源氏物語」の採用を実現させた論理は何か。この時期に『源氏物語』という作品が、文部省やその関係者に正当に理解・評価されたとは考え難い。ましてや、「自由主義の精神」などもってのほかであっただろう。だとすれば、『源氏物語』にしろ、教材「源氏物語」にしろ、時局にふさわしい要素を持つという積極的な理由付けが存在したのではなかったか。

昭和十年前後という時期であれば、表面上どのような理屈がつけられていても、もはや『源氏物語』を持ち出すだけで、軍

国主義一辺倒へと突き進む社会の流れに抗することに十分なっていたのではないか、という見方もあろう。だが、いささかそれは単純なとらえ方に過ぎる。たとえば、当時の出版界の状況を、杉森久英は次のように回顧している。

あとで聞いたところによると、その日（昭和一四年二月二日）は中央公論社で、永年の企画だった谷崎潤一郎氏の現代語訳「源氏物語」の第一巻が発行になった数日後で、嶋中社長が天皇陛下に献上のため、宮中に参内したのであった。（中略）

谷崎訳「源氏物語」は「谷崎源氏」という略称で発売されたが、派手な新聞広告のせいもあって、売れ行きは非常によかった。ちょうど世間の風潮も、昭和初年のモボ、モガ、ジャズのモダン趣味の時代が過ぎて、日本文化の伝統を見直そうという時期に来ていたので、「谷崎源氏」は売れに売れた。（中略）中央公論社の出版物は、現代的、あるいは時事的感覚に特長があって、「源氏物語」のような古典的、あるいは教養的な分野の読者を、どれほど吸引できるか、疑問だった。

ところが、いざ打ち出してみると、最初の月から一七、八万の部数が出た。この売れ行きは、一冊だけの単行本でも大きいのに、谷崎源氏は全部で二十六巻あり、これが毎回二巻ずつ十三回にわたって配本されるから、完結するまで二年余りの間、毎回十数万の読者（途中ですこし減少するとしても）が保証されるわけである。（杉森久英『大政翼賛会前後』昭和六三年・文芸春秋）

『源氏物語』を持ち出しただけで、時流への抵抗と結論づけることは、あまりに早計である。ある意味で当時の『源氏物語』ブームは、まさに時局に適合した「日本への回帰」すなわち国粋的傾向の一部を成していたとも考えられる。結局のところ、教材「源氏物語」についても、その本文とその周辺を詳細に調べ、「軍国主義への抵抗」という評価を疑いつつ検証してみる必要があるように思われる。予見を含めていえば、『源氏物語』をただ教材化したことだけで抵抗の姿勢とみなすような見解を認めてきたところに、教材原典の権威によりかかりすぎた、戦後の古典文学観・古典文学教育観の大きな問題があるのではないだろうか。

二、「サクラ読本」の「源氏物語」

昭和十三年から使用された『小学国語読本』尋常科用、すなわち「サクラ読本」の巻十一に、教材「源氏物語」は登場した。本文は十三ページから二十四ページにわたっている。以下、その本文を引用する。かなづかい・ルビ・改行は、教科書本文に従った。漢字の字体もできるだけ教科書で使用されたものに近づけた。

才　　漢　假

第四　源氏物語

紫式部は、子供の時から非常にりこうでした。兄が史記を讀んでゐるのを、そばでじつと聞いてゐて、兄より先に覺えてしまふ程でした。父の爲時は、

「あゝ、此の子が男であつたら、りつぱな學者になるであらうに。」

と言つて歎息しました。

大きくなつて、藤原宣孝の妻となりましたが、不幸にも早く夫に死別れました。其の頃から紫式部は、筆をとつて有名な源氏物語を書始めました。

其の後上東門院に仕へて、紫式部の名は一世に高くなりました。彼女は文學の天才であつたばかりか、婦人としても、まことに圓滿な、深みのある人でした。

父爲時が願つたやうに、若し紫式部が男であつたら、源氏物語のやうな假名文は書かなかつたでせう。當時、假名文は女の書くもので、男は漢文を書くのが普通であつたからです。しかし、假名文であればこそ、當時の國語を自由自在に使つて、其の時代の生活を細かく寫し出すことが出來たのです。かう考へると、紫式部は、やつぱり女でなくてはならなかつたのです。

源氏物語五十四帖は、我が國第一の小説であるばかりでなく、今日では外國語に譯され、世界的の文學としてみとめられるやうになりました。

次にかゝげる文章は、源氏物語の一節を簡單にして、それを今日の國語で表したものですが、たゞこれだけで見ても、約九百年の昔に書かれた源氏物語が、如何によく人間を生き〳〵と、美しく、細かく寫し出してゐるかがわかるでせう。

髮　　表

（一）

のどかな春の日は、暮れさうでなか〳〵暮れない。

きれいに作つたしば垣の内の僧庵に、折から夕日がさして、西側はみすが上げられ、年とつた上品な尼さんが佛壇に花を供へて、靜かにお經を讀んでゐる。顔はふつくらとしてゐるが、目もとはさもだるさうで、病氣らしく見える。そばに、二人の女がすわつてゐる。

時々女の子たちが出たりはいつたりして遊んでゐる中に、十ばかりであらうか、白い着物の上に山吹色の着物を重ねてかけ出して來た女の子は、何といふかはいらしい子であらう。切揃へた髪が、ともすると扇のやうに廣がつて、肩の邊にゆら〳〵掛るのが目立つて美しく見える。どうしたのか、其の子が尼さんのそばに來て、立つたまゝしく〳〵泣出した。

「どうしました。子供たちと言合ひでもしたので

すか。」
と言ひながら、見上げた尼さんの顔は、此の子とどこか似た所がある。
「雀の子を、あの犬君が逃したの。かごに伏せて置いたのに。」
と、女の子は、さもくやしさうである。
そばにゐた女の一人は、
「まあ、しやうのない犬君ですこと。うつかり者だから、ついゆだんをして逃したのでせう。せつかくなれて、かはいくなつてゐたのに。烏にでも取られたらどうしませう。」
かう言つて、雀を探しに立つて向かふへ行つた。それは、此の子の乳母であるらしい。
尼さんはもの靜かに、
「いやもう、あなたはまるで赤ちやんですね。どうして何時までもかうなんでせう。わたしがこんなに病氣で、何時とも知れない身になつてゐるのに、あなたは雀の子に夢中なんですか。生き物をいぢめるといふことは、佛様に對しても申しわけのないことだと、ふだんから教へて上げてあるでせう。さあ、こゝへちよつとおすわりなさい。」

（挿絵）

子供は大人しくすわつた。尼さんは子供の髪を撫でながら、
「櫛を使ふことをおきらひだが、それにしては、まあ、何といふよい髪でせう。でも、かう何時までも赤ちやんでは困りますよ。もう、あなたぐらゐになれば、もつともつと大人しいはずです。さう〳〵、なくなられたあなたのおかあさんは、十二の時おとうさんをおなくしでしたが、それはそれは、よく物がおわかりでしたよ。今にでも此のおばあさんがゐなくなつたら、一體あなたはどうなさらうといふのでせう。」
さすがに子供は、じつと聞きながら目を伏せてゐたが、とう〳〵うつ伏せになつて泣入つてしまつた。とたんに、美しい髪がはら〳〵と前へこぼれかゝる。

（二）

それから一年程過ぎた。尼さんは去年の秋とうとうなくなつて、孫の紫の君は、たつた一人此の世に殘されてしまつた。
不幸な紫の君は、源氏の君のうちに引取つて養はれることになつた。
年の若い源氏は、小さい妹でも出來たやうに、いろ

いろと紫の君のめんだうを見てやつた。紫の君も、源氏をほんたうのにいさんだと思ふ程、したしくなつた。

しかし、紫の君は、今でもおばあさんのことを思ひ出しては、時々泣いてゐる。此の不幸な子を、どうしたらなぐさめてやることが出來るか、源氏は何時もそれを考へねばならなかつた。

今日も源氏は紫の君に畫を書いて見せた。

いろ〳〵の畫を書いてやつた。最後に女の畫を書いて、其の鼻を赤くぬつて見せた。紫の君は思はず笑ひ出した。

源氏は筆の先に赤い繪の具をつけて、鏡を見ながら、自分の鼻をいたづらに赤くぬつて見せた。紫の君は、とう〳〵笑ひこけてしまつた。

「わたしの鼻が、ほんたうにかう赤かつたら、どうだらうね。」

「まあ、いやなことをおつしやる。」

紫の君は、繪の具がほんたうにしみ込んだら、にいさんがお氣の毒だと思つた。源氏はわざと拭いたまねをして、

「ほら、すつかりしみ込んでしまつた。落ちないよ。」と言つて、まじめな顔をしてゐる。

紫の君はさも心配さうに、水入の水を紙にひたして、源氏の鼻を拭きにかゝつた。

「いや〳〵、赤い方がまだ増しだ。此の上、墨でも附いて黒くなつたら大變ぢやないか。」

「すつかり落ちましたよ。」

「落ちた。それは有難い。」

さつきまで泣いてゐた紫の君は、すつかり晴れやかになつてゐた。

外はうらゝかな春の日である。木々の梢がぼうつとかすんでゐる中に、とりわけ紅梅が美しくほゝゑんでゐる。

三、「国民文化」教材としての「源氏物語」

この教材は、教育現場でどう生かされることが期待されていたのか。その編纂者側の意図として公にされたものを整理し、問題点をまとめてみたい。

『小学国語読本尋常科用巻十一編纂趣意書』（昭和十三年・文部省）の「三　編纂上特に留意した点」には次のような記述がある。

巻十が国民精神の諸相を具現することを以て編纂の主題としたのに対し、本巻は、かゝる国民精神を基礎として、抑も如何なる国民文化が顕現したかといふ見地に立つて、主として国民文学を中心とし、国民思想及び文化に関係あ

る教材を選び、これを中軸として編纂したものである。従つて本巻の中軸をなす教材は、「見渡せば」「源氏物語」「法隆寺」「皇国の姿」「古事記の話」「松阪の一夜」「虫の声」「鉄眼の一切経」「日本刀」の九課であるが、尚「吉野山」「京都」「電話の発明」「日本海海戦」「間宮林蔵」「月光の曲」「空中戦」等も、右の中軸教材と直接間接に提携しつゝ、本巻編纂主題の精神を拡充するものである。

さらに、「四、教材及び其の取扱に対する注意」には、次のように記されている。

第四課「源氏物語」。前課「京都」を受け、其の京都の昔、平安京の最も栄えた時代に、枕草紙や源氏物語の如き世界に誇るべき文学が出たことを想はしめるのが本課である。枕草紙に就いては、既に巻十「雪の山」に依つて其の片鱗を示した。本課は、作品価値の更に高く、更に大きい、いはば我が文学の最高峰たる源氏物語の面影を見せようとするものである。固より爛熟し切つた当時の世相のよく現れてゐる源氏物語であるだけに、これを教材化することは至難の事に属する。従つてそこに編纂上大なる考慮が払はれてゐることに先づ注意せねばならない。

本課は前後二段に分れ、後段は更に二段になつてゐる。前段には作者としての紫式部、及び作品としての源氏物語を簡明に紹介し、評論した。後段は文例で、しかも此の課の本文をなしてゐる。源氏物語の「若紫」及び「末摘花」の巻中、紫の君の生立に関する部分を抜粋し、それを現代語で表したのであるが、特に教育的見地から、削除変更した部分もあるから、原文を参照するとしても、此の考慮を破壊するが如きことがあつてはならない。

挿画説明

「若紫」の一節を絵巻物風に表したもの。

要するに、編纂者の意図は、『源氏物語』は「国民精神」を基礎とした世界に誇るべき文学作品だから、そして、そのことを小学生も知っておくべきであるから教材化した、ということに尽きる。その際、『源氏物語』の真の姿は決して知らせるべきではないので、「教育的」配慮を施した、というのである。後に批判が浴びせられたのは、まさにこの意図と配慮に対してであった。詳しくは別稿に記したが、橘純一は、『源氏物語』は「大不敬の書」であり、またこの教材も、編纂者の努力の甲斐もなく「だらけ切つた雰囲気を感じさせる」と批判したのである。

ところで、『源氏物語』のどのような特色、教材「源氏物語」のどのような部分に、この当時求められていた国粋主義的な「国民精神」と合致するものがうかがえるのか。今日の感覚で教材本文を見る限り、そういった要素は見当たらない。同じ教科書に収められた他の「国民文化」教材には、どこかしらそれらしい記述が含まれており、たとえ「京都」のような、古都の姿を紹介する文章であっても、「東稜を拝して昭憲皇太后をし

のび奉り、麓の乃木神社に詣でてつく〴〵と忠臣の心を思ふ。」といった一文が挿入され、国粋的な精神性が露呈している。それに比べ、「源氏物語」の教材本文には、「国民精神」を明確に反映したと断定できる記述が見当たらず、異色の教材といった趣がある。はたしてこれは、この教材が、まったく時局とのかかわりを持っていなかったことを意味するのだろうか。

この教材についてより詳しく解説したものに、国語教育学会編の『小学国語読本綜合研究』の巻十一（岩波書店・昭和十四年）がある。編纂者の立場から意図を述べた「要説」、国文学研究の立場から論じた「解釈」、実践の立場から言及した「指導」において、それぞれ詳しく説明がなされている。

「要説」は、教科書編纂者の井上赳の執筆。従って、その趣旨は先の『小学国語読本尋常科用巻十一編纂趣意書』と大きな違いはない。「本課は、作品価値に於て、構想表現において更に高い、いはば我が文学の最高峰である源氏物語の面影を見せようとするものである。」と『枕草子』と比較しつつ教材としての意義を述べ、やはり「教育的」配慮から教材化に苦心したことを吐露している。

ただし、この教材そのもの価値や意義については、若干踏み込んだ説明がなされている。まず、教材前半の文学史的解説の部分については、次のように述べている。

源氏物語は、時に仏教者流又は儒教者流から妄言・邪淫・淫靡の書として悪評されたこともあるが、しかしそれは何等紫式部及び作品の価値を左右するものでなく、後世は各時代を通じて、之を我が国第一の文学として尊敬した。殊に宣長によつて文学本質論から絶賛され、明治以後現代の学者によつていよ〴〵正しく批判されるとともに、一方外国語に翻訳されて今や世界的文学の地位を優にかち得たわけである。

尚この前段の評論中、注意すべきは国語と仮名文字との関係で、これは後の「古事記の話」と相照応し、彼と此と歴史的連鎖を持つことに注意しなければならない。

教材本文や『巻十一編纂趣意書』では不明確であった、「国民精神」「国民文学」との関連づけが、暗示的にここに示されている。もちろんそれは、『源氏物語』と本居宣長の関連をごく簡単に触れているにすぎない。だが、宣長はこの教科書においては既出で、巻十の第二十七「御民われ」に「敷島のやまと心を人問はば朝日ににほふ山ざくら花」の歌とともに「我が国民精神の発揚につとめた人」として紹介されている。

教材後半の現代語訳の部分については、次のように述べている。

先づ主題は源氏物語中の婦人の理想として表現された紫の上の生立である。紫の上の幼時は、ごく無邪気な少女として描かれてゐる。普通の小説などによく見がちな、やゝませた冷悧さを持つた女でなく、将来人間として伸びて行く余裕のある少女に出発してゐる所に、作者が非凡な人生批

評眼の持主であつたことを先づ考へさせられる。

この現代語訳の部分の教材価値は、少女の無邪気さにある、ということになる。だが、なぜ無邪気さか、あるいは無邪気さに価値があるならなぜこの教材でなければならないのか、といったところは弱く、いささか説得力を欠いているようだ。

つまるところ、あくまで世界最高の物語文学『源氏物語』の存在を児童に知らせることに意義を見いだしていたのであって、その点で重要なのは前半の解説部分であり、現代語訳はそれに付随したものに過ぎないということになろうか。

「解釈」は島津久基による。島津は文学博士で、一高教授、東大助教授、東洋大学国文科長等を歴任しており、『対訳源氏物語講話』等の著作もあった。

『源氏物語』教材化の意義については、「この大傑作の存在を、そしてこの名小説を祖国が所有してゐる高い誇を、初めに日本小国民の胸裡に明確に刻ませることに於て、尊い成功を齎さずには措かないと信ずる。」と、井上と同趣旨の主張を謳い上げている。本文中のいくつかの記述についての、やや詳細な解釈も付されており、前半部分については、『源氏物語』の成立と紫式部の人格の高さとの関連、後半部分については、紫の君の無邪気さをやはり強調している。

「指導」は武内好将の執筆で、「指導の問題」「指導の方法」「指導の発展」の三項目からなる。「指導」は、本来は実際の教授に即して書かれるべきものであるが、武内の記述はやや具体性を欠いている。ひたすら『源氏物語』の文学的価値を賛美することに筆を費やし、ごく簡単な「指導の方法」を示して、原文を紹介するときはやはり十分な注意が必要、と結んでいる。

四、「若紫」教材化の「教育的」配慮

先に、「教育的」配慮から教材化に苦心した、と編纂者が述べていたことを示したが、具体的にはどのような配慮がなされていたのか。それは、教材化された本文と原文とを比較すれば容易に判明する。

『源氏物語』を読んだ経験があれば即座に気づくことであり、わざわざ紙数を費やすほどのことでもないが、念のために、小学館の古典文学全集の『源氏物語（一）』（校注・訳　阿部秋生・秋山虔・今井源衛）に収められている現代語訳を用いて、その配慮の実態を示してみたい。傍線部は、教材化にあたって削除あるいは書き改められた部分に相当する箇所である。

相手になる人もいなくて、所在ないので夕暮れのたいそう霞んでいるのにまぎれて、例の小柴垣のあたりにお立ち出でになる。供人たちはお帰しになって、惟光朝臣と垣の内をおのぞきになると、すぐそこの西面の部屋に、持仏をお据え申して、お勤めをしている、それは尼であった。簾を少し巻き上げて、花をお供えするらしい。中の柱に寄りかかってすわって、脇息の

上に経巻を置いて、じつに大儀そうにして読経していたこの尼君は、並々の人とは思われない。四十すぎぐらいで、ほんとに色が白く気品があり、ほっそりしているけれども、頬はふくよかで、目もとのあたり、髪が見るからに美しく切りそろえられた端も、なまじ長いのよりも格別当世ふうで気がきいているなと、君はしみじみ心そそられてごらんになる。

こざっぱりしたふうの女房が二人ほど、それから女の子が出たりはいったりして遊んでいる。その中に、十歳ばかりであろうかと思われて、白い下着に山吹襲などの着ならしたのを着て、走って来た女の子は、大勢姿を見せていた子供たちとは比べものにならないほどで、成人の後がさぞかしと思いやられて、見るからにかわいらしい顔だちである。髪は扇を広げたようにゆらゆらとして、顔は手でこすってひどく赤くして立っている。

「何事ですの。子供たちといさかいをなさったのですか」と言って、尼君の見上げている顔だちに、少し似ているところがあるので、これは娘なのだなと君はごらんになる。「雀の子を犬君が逃がしてしまったの。伏籠の中にちゃんと入れておいたのに」と言って、ほんとに残念がっている。そこにすわっている女房が、「また、あのわからずやが、こんな不始末をしてお叱りを受ける、ほんとにいけませんねえ。雀はどこへ行ってしまったのでしょう。ほんとにかわいらしくだんだんになってきておりましたのに。烏などが見つけたら大変です」と言って立ってゆく。髪がゆったりとして、とても長く、見苦しくない人である。少納言の乳母と人が呼んでいるらしいこの人は、この女の子の世話役なのであろう。

尼君は、「まあ、なんと幼いことを。たわいなくしていらっしゃるのですね。こんなに今日明日にもと思われる私の命であるのを、なんともお考えにならないで、雀を追いかけていらっしゃるなんて。仏様の罰があたることですよといつも申し上げていますのに、困りますね」と言って、「こちらへおいでなさい」と言うと、女の子はそこに膝をついてすわる。

顔つきがまことに見るからにいじらしく、眉のあたりがほんのりと美しく感じられ、あどけなくかき上げている額の様子、髪の生えざまが、たいそうかわいらしい。これから成人していく様子を見とどけたいような人よと、君はじっと見つめていらっしゃる。というのも、じつは限りなく深い思いを捧げ申しあげるお方に、じつによく似ているので、それに、しぜん目を引きつけられるわけであったのだ、と思うにつけても涙がこぼれてくる。

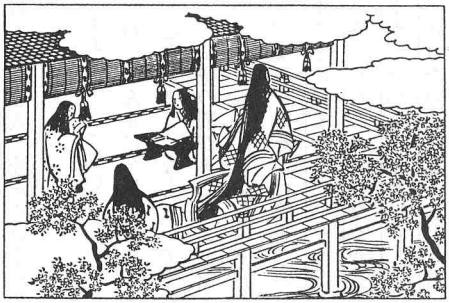
尼君が、髪をかきなでかきなでして、「櫛を入れるのをいやがりなさるけれども、きれいな御髪ですこと。ほんとにたわいもなくていらっしゃるのが、おかわいそうだし気がかりなのです。これほどの年になれば、ほんとにこんなふうではない人もありますのに。亡くなった姫君は十ばかりで、父君に先立たれなさったころ、ずいぶんなんでもおわかりだったのですよ。たったいまにも私が世を去ってあなたをお見捨て申したなら、ど

うやってお暮らしになろうというのでしょう」と言って、ひどく泣くのをごらんになるにも、君はわけもなく悲しいお気持ちになられる。幼心地にも、さすがに、泣く尼君をじっと見つめて、伏し目になってうつぶしたところに、こぼれかかってくる髪の毛は、つやつやとみごとに美しくみえる。

教材化にあたっての「教育的」配慮とは、幼い紫の上を見詰める光源氏の存在を消すことにあった。源氏は、義母である藤壷の女御を恋慕し、その面影を紫の上に重ね合わせていたのであるから、当然と言えば当然のことであろう。このような配慮は、本文だけでなく、挿絵においてもなされている。近世初期に刊行された山本正春編の絵入本『源氏物語』（承応三年刊）の挿絵を明らかに模して描かれているのだが、やはり光源氏を描いた部分が削除されている。（図版参照。なお、絵入本『源氏物語』は平安文学論究会編『講座平安文学論究　第八輯』〔平成四年・風間書房〕の伊井春樹氏の論文「『源氏綱目』の挿絵」より転載した。）

紫の上に向けられたまなざしは、単に少女のかわいらしさを愛でるものではなく、屈折した恋愛感情そのものであり、しかもそれは、義母であり皇妃でもある女性との密通へと発展するものであった。橘純一に『源氏物語』を「大不敬の書」と言わしめたものの主たる要素が、原文には明確に描き出されていた。だからこそ「教育的」配慮がなされ、その要素を取り払うため

絵入本『源氏物語』「若紫」



第四期国定教科書（サクラ読本）「源氏物語」挿絵

の努力がなされたのだが、なぜそこまでしてもこの扱いにくい教材を載せねばならないと編集者は考えたのか。この問題については「アサヒ読本」の考察の後で結論を述べる。

五、「アサヒ読本」の「源氏物語」

第五期の国定教科書である「アサヒ読本」、すなわち昭和十六年三月の国民学校令公布に対応した『初等科国語』巻七にも、若干の修正が加えられた「源氏物語」が収められている。所収の巻数が変わったが、これは一二年生用が別の名称の教科書、「ヨミカタ」一二・「よみかた」三四となったためで、配当学年はやはり六年生である。

本文は、紫式部と『源氏物語』を解説をした部分、および現代語訳の一（「若紫」によった部分）については、「サクラ」読本との大きな異動はない。「其の後→そののち」、「なか〳〵→なかなか」等、表記が多少改められた程度である。『源氏物語』の評価についての記述が、「今日では外國語に譯され、世界的の文學としてみとめられるやうになりました。」から「今日では、世界にすぐれた文學としてほめたたへられてゐます。」と書き改められていることに、国民学校期の特色が表れている程度である。「世界」から認めてもらうという卑屈な態度を示すべきではない、という発想からであろう。

現代語訳の二番目の部分は、「紅葉賀」を用いたつぎの文章に全面的に差し替えられている。

二

雀の子が逃げて泣いた紫の君は、その年の秋おばあさんに死なれて、たつた一人この世に取り残されてしまつた。

紫の君は、いとこの源氏の君のうちへ引き取られることになつた。あの乳母や犬きも、紫の君といつしよに引き移つた。

源氏は、小さな妹でもできたやうに、いろいろと紫の君のめんだうを見てやつた。紫の君も、源氏をほんたうのにいさんだと思ふほどなついて來た。

しかし、紫の君は、やはりおばあさんのことを思ひ出しては泣くことがある。この不幸な子を慰めるために、源氏は繪をかいて見せたり、人形を求めてやつたりした。

お正月になつた。元日の朝、源氏は、ちよつと紫の君のゐる部屋へ行つてみた。さうして、

「どうです。お正月が來たから、あなたも少しはおとなしくなつたでせうね。」

といつた。

りつぱな書棚（しよだな）に、たくさんの人形や、家や、車が並べてある。紫の君は、それを部屋いつぱいにひろげて、人形遊びにいそがしい。

「豆まきをするつて、このお人形さんを大きがこはしました。わたしがつくろつたのですよ。」

と、さも大變なことででもあるやうに、紫の君は源氏にいつた。

「よしよし。あとで、りつぱにつくろはせてあげよう。今日はお正月だから、泣いてはいけませんよ。」

といつて、源氏は出て行つた。

紫の君は、人形の一つをおばあさんと呼んでゐる。お正月だから、きれいな着物を着せてあげた。

「さうさう。このおにいさんにも、いい着物を着せてあげなければ。」

さういつて、今一つの人形にも美しい着物を着せた。

「さあ、御參内だ。車にお召しください。犬きや、おまへはおにいさんのお供をするのですよ。」

「はい。」と答へて次の間から出て來た犬きが、その車を引いた。

庭では、うぐひすが、美しい聲で「ほうほけきよ。」と鳴いた。

「末摘花」から「紅葉賀」への差し替えは、やはり「サクラ読本」に対する橘純一らの批判を意識してのものであろう。橘は『文芸春秋』昭和十三年十月号の「源氏物語の小学教育越境」において、先の「末摘花」を教材化した部分からは、若い男女が戯れあっているなまめかしい雰囲気が十分に感じ取れる、と指摘していた。もとより編纂者側にはそのような見解を認める気はなく、「サクラ読本」の本文にしても、単に紫の上の幼いかわいらしさが示されているだけと理解していただろうが、批判をかわすために、紫の上の幼さがよりいっそう強調された場面への差し替えがなされたのであろう。

編纂者側の解説としては、まず文部省図書監修官の石森延男が執筆した『初等科国語七、八の編纂趣旨』があげられるが、特に目新しい内容はない。女子教材としての意義や、「わが国の傑出した古典を解説した文章」であること等、「サクラ読本」の時と同様の内容をを記すのみである。

『初等科国語七教師用』（昭和一八年・文部省）には、その女子教材としての性格が、より詳しく次のように述べられている。

この室に「時々、女の子たちが」出入りするのは、無邪気に遊んでゐるのである。「十ばかりであらうか」以下は、紫の君の叙述で、着物は白に山吹色を重ねてゐる。「かけ出して来た女の子」は、無邪気な態度としての表現である。元来、紫の君はその少女時代、無邪気であどけなく、ませてゐない子として描き出されてゐるところに特徴があり、これがその環境の変化や、いろいろな体験や、教育等によつて次第に理想的な女性に育つて行く過程が源氏物語に表現されてゐる。そこには幼さの中からすくすくと伸びて行くものを見つめてゐる作者の児童観、教育観さへ窺はれるのである。

ここに描かれている少女のあどけなさを強調し、そこから作

者の児童観・教育観まで引き出そうとするのは、いくら何でも飛躍した論理展開ではないだろうか。『編纂趣旨』では、この「源氏物語」を、「姉」「いけ花」「朝顔」とともにひとまとめに女子教材として扱っているが、少女が大人の世界へと視野を広げていく過程を題材とする「姉」「いけ花」とは、はっきりと方向性を異にした文章であると言えよう。「理想的な女性像」の表出は、「サクラ読本」の段階から強調されていたことではあるが、この現代語訳の部分だけからそれを読み取るのは、およそ不可能なことである。

このような建て前と実態との乖離に注目するならば、むしろ編纂者には、とにかく『源氏物語』を国定教科書の教材としなければならないという目的意識が先にあり、それを実現し継続するために、後から理屈がつけられているのではないかと思われてくる。『源氏物語』の中から小学生に紹介しても差しつかえのなさそうな場面が選び出され、その場面に紫の上の幼さが描かれていたからこそ、それが教材の価値とされてしまったのではないだろうか。

六、国定教科書と宣長

では、どうしてそこまでして『源氏物語』を教材化し、国定教科書に掲載する必要があったのか。その理由は、表向きには、「世界に誇るべき文学作品の存在を国民に広く知らしめる」ことにあった、ということになるだろう。だが、その背後には、編纂者や国文学研究に携わる者たちの、もっと切実な思惑があったのではないだろうか。

『初等科国語七教師用』の「教材の価値」には、「サクラ」読本の段階よりも強化された『源氏物語』賛美が、以下のようになされている。

源氏物語の文学的価値の絶大なことに就いては、真摯な学者の意見の一致するところであるから、ここに重ねていふ必要を見ないのであるが、ただ、大樹には大きな陰が伴なふやうに、古来源氏物語ほど皮相な偏見から、悪罵にひとしい批評を蒙つた作品も少いであらう。それには種々の理由がある。世に書物といへば、経書の類のみを頭において考へた時代の学者もある。かうした人々が、一度小説といふものを見れば、淫靡の書であると考へるのは当然である。また近古時代、僧侶が学権を握り、宗教的な偏見から物語の創作を妄語邪淫とそしつたことも手伝つてゐる。もとより平安時代の貴族の生活そのものに、さうした批判を受けなければならないものはあるが、しかしそれは敢へて源氏物語が蒙るべき筋合ではなからう。いやしくも源氏物語は、つつましい女性の作物であり、熱愛は描いても、後世の作者が敢へてしたやうな官能的なものは殆ど存在しないといつてよい。源氏物語がいかにすぐれた文学であるかは、営々三十五年の研究によつて古事記伝を大成し、わが

国体・国民精神の真髄を闡明にした本居宣長をして、玉の小櫛の「もののあはれ論」によってこれを絶讃せしめたことによってもわかるであらう。

橘純一らの批判を意識して書かれたためであろう、「アサヒ読本」の時よりも本居宣長の存在をいっそう前面に押し出した形で『源氏物語』の価値が強調されている。宣長が物語として「ことにすぐれてめでたきもの」（『源氏物語玉の小櫛』）として『源氏物語』を評価していることが、海外での評価云々よりもはるかに重い意味を持っているのである。

この時期、文学教育はもはや前時代の大正自由主義教育の悪しき産物として否定されていた。「谷崎源氏」が飛ぶように売れる一方で、やはり王朝文学の世界に耽溺することなどは、軟弱な行為として否定的に見る風潮も強かったであろう。国文学研究や文学教育に携わっているものが、国家権力に公認されつつ研究執筆活動を続けるには、国学とりわけ宣長の看板を掲げることが、ほとんど唯一の選択肢であったはずである。あるいは、自分自身に対しても、時局に迎合して行くことの納得しやすい説明のつけ方であったかもしれない。無誤謬性を前提とした国定教科書への掲載を許されることは、まさに国家権力公認のものとしてのお墨付きをもらうに等しい。それだけに、古典研究と国体とを結び付ける理屈が抽出できる宣長という存在は、強調されねばならなかったのである。もちろん、それが宣長本来の学問的な姿勢と全面的に一致するか否かは別の問題である。

中内敏夫『軍国美談と教科書』（昭和六三年・岩波新書）によれば、国定教科書教材の題材となることを、各地方自治体や陸海軍が求めるということが、しばしばあったという。教材「源氏物語」採用とその継続の背景にも、多くの関係者の潜在的あるいは顕在的要求があったことは当然考えられることである。当時の国文学関係者の具体的な動向については、まだまだ調査の段階であり推測の域を出ない。しかし、「サクラ読本」の教材に、宣長の学問を意識した教材の系譜が見いだせることは事実である。

巻十「御民われ」には紀友則、源実朝らの和歌四首とともに宣長の「敷島のやまと心を人問はば朝日ににほふ山ざくら花」が載せられている。巻十一には、「源氏物語」よりも後に「古事記の話」があり、続けて『古事記伝』の著者宣長と加茂真淵の出会いを描く「松阪の一夜」がある。巻十二の最後、すなわち小学校段階の最後を飾る教材は、「山ざくら花」であり、ここにも加茂真淵や高崎正風らの九首の和歌とともに、宣長の「さし出づるこの日の本の光よりこまもろこしも春を知るらむ」が掲載されている。『小学国語読本綜合研究』巻十二によれば、この「山ざくら花」という教材単元は、一年生の最初の教材である「サイタ　サイタ　サクラガサイタ」に対応しているという。その「サイタ　サイタ　サクラガサイタ」について、編纂者の井上赳は、『小学国語読本綜合研究』巻一で次のように述べている。

先づ巻頭に「サクラ」を置いたのは、桜に付随する国民的感情を考へるからであり、これが巻一の巻頭であるばかりでなく、実に国語読本全十二巻の開巻第一であることを考へるからである。（中略）唯排列の上から自らなる暗示を持つに過ぎないのであるから、かゝる暗示を初学の児童に強ふべきでないことはもちろんであるが、しかし国語教材は児童の永久の精神的糧であり、随つて後年幾度か回想するに及んで、かくの如き暗示が次第に児童の心に働きかけるであらう。排列上の暗示・調和・展開は、当面に於ては唯個々教材の美化であり、無言の感情情緒である。

ここでいう「桜に付随する国民的感情」とは何か。同教材の「指導の問題」として、大野静は次のように述べている。

「花は桜木、人は武士」と昔から言はれてゐる通り、日本人の性情を最もよく象徴してゐるものが桜の花と日本刀である。象徴の本義は譬喩や理屈でなく実に直観的に感ずるもの、覚するものにあるのだから、余り理屈や説明でこじつけぬ方がよい。咲きの盛りの現前の景情を文と絵と相関して端的に感得観念せしめる様にしたい。因に本居宣長の「敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山桜花」という歌は誠に叙上の点を一点のゆるみもなく表現されている。

このような点に注目するならば、「サクラ読本」は、第一巻巻頭から第十二巻巻末まで、宣長のいう「大和心」――桜に象徴されるところの――を強く意識した精神論によって貫かれていたとも言えよう。『源氏物語』をどうにかして加えるよう努力したのも、この一貫性を整えようとする気持ちが、編纂者に強く働いていたからではないだろうか。

七、「源氏物語」の教材としての特質

「源氏物語」という教材を、当時の小学生たちは、実際にはどのように受け止めたのだろうか。その印象がどう定着していったのかを、広く調査してみるべきかもしれない。私がたまたま身近で耳にした限りでは、やはり他の教材とは全く趣を異にした教材として記憶に残っているという。あのような時代の中にあって、何とも言えないやすらぎを与えてくれたものとして、好印象を残しているようである。

確かに、「サクラ読本」の巻十一、十二に収められた他の教材文と比較してみると、異色の教材であり、他にはこれほど文学作品らしい奥行きと余韻を持ったものは見当たらない。それは、『源氏物語』をもとにした教材であるということ以上に、この教材文自体の文体に由来すると考えられる。

当時の教科書教材は、文学的文章であっても、人物造形が単純で一面的であり、文体も平易で解説的なものが多い。たとえば、先に女子向けの教材として名前の出ていた「姉」なども、登場人物の思いは、次に示したような形で、すべて説明しつくされている。

私はだまつてうなづいた。「ねえさん、これまでずゐぶん我まゝを言つてすみませんでした。」それがのどまで出てゐるのだけど、とう〳〵言へないでしまつた。

児童にとって理解しやすくはあるが、あまりに陰影に乏しいと言えよう。そしてその語られた心情には、道徳的・教訓的な色合いが濃い。

それに比べると、「源氏物語」の「若紫」によった部分などは、先に示したような「教育的」配慮によって、紫の上を見つめる光源氏の心情を消し去った為に、結果的に空白を持った文体となってしまった。「何といふかはいらしい子であらう」と心情を吐露し、この少女に引き寄せられる何かを感じている語り手の目を通して――そのような視座から描かれながらも、その主体がどのような人物かが全く説明されていない。その空白を、読者である児童は、同年代の子供として見つめるような思いや、妹を見つめるような感情などで、各自の経験に即して埋め合わせていくこととなる。六年生のことであるから、中には少しませた者がいて、橘純一が危険を感じたような読み方を無意識のうちにしてしまった者がいても、不思議はない。そのような読みの幅を持った書き方にこの教材自体がなっているのである。

語り手がすべてを語り尽くしてしまうような傾向の文体が目立つ当時の教科書教材の中にあって、このような文章はやはり異色であった。同様のものをあげるとすれば、同じ巻十一の「月光の曲」――ナショナルリーダーの翻訳であるという――くらいであろう。

しかしそれは、やはり宣長読本とでもいうべき「サクラ読本」の構想から、結果的に生じたものであろう。あるいは「教育的」配慮の思わぬ副産物であったと考えるべきだろうか。ともあれ、この「源氏物語」という一教材の存在のみから、編纂者の「自由主義の立場からの抵抗」を読み取ろうとすることは、あまりに無理がある。使用開始直後に橘純一からの批判があったという事実が、戦後の全く異なった状況の中で思わぬ方向に作用し、いささか見当違いな評価が生み出されていった、というのが実態ではなかったのだろうか。

（うどう　ゆたか）